

透明人間×俺

試し読み



俺が勤める研究室では「透明人間研究」をしている。

冗談やネタではなく、大真面目に透明人間になることを目標に掲げて。

すぐに実用化や転用ができる有益な研究にしか、投資がされない不景気な昨今。

へたしたら、研究員が死ぬまで成果をあげられないかもしれない。利益より出費がかさみそうな不毛な研究に、惜しみなく資金提供する酔狂なヤツがいるようで。

その恩恵にあずかって、日々、荒唐無稽なような「透明人間研究」に心血を注いでいる研究員は、これまた気持ちがよいじみたヤツばかり。

これまでの研究や論文が世界的に認められてきた天才たちながら、度を越えた奇人変人ぞろいで、社会適応力皆無。

輝かかしい功績と並んで、大学や研究室を壊滅状態にしたトラブルメーカーとしての実績もすさまじい。

研究員のおおまかな個性や特徴、癖はというと。

情緒不安定、多重人格、研究中に女装、コスプレ、フルチン、いきづまると民族舞踊、奇声をあげて壁に額を打つ、長時間放心、トイレ以外で脱糞、放尿、トイレでひきこもり、赤ちゃん言葉、常に四つん這いで移動、「ニャー」としか口にしない、などなどなど。

そんな魑魅魍魎な彼ら、十人ほどがたむろしする研究室が問題なく機能しているのは、一重に（比べたら）極極凡人の俺のおかげ。

俺は研究者ではなく、文系の人間、大会社の営業マンだった。理系の知識は乏しくとも、昔から、人間関係を良好に保つ能力に優れ、会社では重宝されて。

その腕を買われて、わき目もふらず「透明人間研究」に没頭する狂人、ではなく、宇宙人のように言葉が通じない研究員のお守り役に抜擢されたわけ。

研究には携わらず、暴走しがちな研究員を宥めたり、彼ら同士のいざこざを収めたり、外部の人との仲介や、会社に報告連絡をするのが役目。

たしかに、研究員たちは、俺がこれまで接してきた人たちより、格別に扱いにくかったが、手に負えなくはなかった。

どれだけ異質で異常だろうと、基本、俺はどんな人にも悪感情を抱かなかったし。

彼らは独特な世界観を持ち、不可解な言動をすることが多いとはいえ、暴力をふるったり、物を壊したり、人を貶めたり、攻撃的ではなかったし。

彼らが研究にだけ集中できるよう、調整する日々は、なかなか充実していたものの、あくまで、それは表むき。俺の裏の顔はスパイ。

全身を這う手が、一人ではなく、複数人のものらしいこと。

すくなくとも、股間に二つの手、胸に二つの手と二人いるのはタシカ。

しかも手の骨ばった固さ、触りかたの荒っぽさから、全員男のよう。

前戯に女性がくすぐるのとは訳がちがう、欲情した獣ががつくような愛撫。

複数の男に犯されるなんて、そんな願望を持っている自覚はないし、エロビデオを見たり、想像して自慰をしたこともないのに？

頭を混乱させながら、息を切らす男たちの熱い手で全身まさぐられて

「あ、あ、ああん、や、やらあ、くう、はうん・・・！」と鳴きに鳴き、とめどないように体をたかぶせてしまう俺。

このまま夢精させられるのではないかと、焦りだしたところ、ジッパ―が下ろされ、膨らみが跳びでた感覚がし、はっとする。

「これは、夢ではない・・・！」と重い瞼をこじ開けるも、部屋のうす暗がりしか目に写らず。

だれも見当たらないはずが、体は撫でまわされつづけ、濡れたパンツを二つの手にぎりこまれ、じゅぶじゅぶ！

怪奇現状が起きているのかと思ひ、慄きつつも「あ、ばか、そんな、強、や、やあん、ひあ、だめえ・・・！」とお漏らしした股間をしこられて、水音に辱められて、体が歓喜するのを、どうすることもでき

ず。

ついには、びちやびちやのパンツもずらされて、そそり立ったのを、二つの舌がぺろぺろ。

「やあん・・・！」と涙を散らして首をふろうと、かまわず、Yシャツ引きちぎって。

さんざん、揉み揉みされて膨らんだ乳首を二つとも、生温かい舌ではむはむ、ちゆうちゆう。

「や、ば、ばかあ・・・！そ、な、いっば、舐め、あ、ああ、ふああ・・・！俺、シャ、ワ、は、はう、あ、浴び、て、な、あひい！み、みんな、して、だめ、ってえ、あ、あ、あ、あ、あ、やらああ・・・！」

そこたら中から水音を立てて、耳を食み、首をしやぶつて、胸を吸い、脇を舐め、股間を食る。
数えたところ、十の舌。

魔法使い

×俺



俺と魔法使いは仲がよろしくない。

魔王打倒をめざし、旅をするパーティーは結束が固く、戦いで連携もとれている。

が、個性派ぞろいの仲間のなかで、魔法使いは断トツに扱いにくい。

極度の人ざらいで、いつも苦虫を噛み潰したような顔をし、への字の口をめつたに開くことなく、人が触れたら悲鳴をあげるし、近づかただけで、すさまじい拒否反応。

幼なじみの勇者以外には、だ。

勇者曰く、村にいたころ、人にひどい裏切りをされ、以降、ハリネズミのように威嚇しつばなし。

集団行動をするのには、かなり難のある性格だが、魔法の知識も技量も一流で、無尽蔵な魔力を保有しているとあって、パーティーに欠かせない一人。

必要最低限の会話をする以外、魔法使いに干渉しなければ、ノー問題だし。

はじめは、とまどっていた仲間は、勇者の助言もあって、今や適度な距離感を保ち、適切な対応をし、うまいことやっている。

ただ、俺だけは痛に障ることが多い。

というのも、魔法使いは俺に対してだけ、やたら辛口だから。

「勢いまかせに突っ走って、勇者に迷惑をかけるな、このめでたい脳筋が」

「自分の手柄が欲しいあまりに、勇者を押しつけてどうする、この筋肉だけの脳なし」

「女遊びをするのはいいが、勇者の顔に泥を塗るような真似をするな、この見かけ倒しの筋肉下劣野郎」

イタイところをついて、かならず筋肉質なのを茶化すような悪態をつくのが、なんとも忌々しい。

反論しようにも、凶星だし、俺はあまり口が回らないほうだし、つい、かっとなつて胸ぐらをつかもうとするものの、そのたびに勇者が「まあまあ」と仲介。

命の恩人である勇者に宥められては、引っこむしかなく。

それにしても勇者が「悪気はないから」と俺の肩をぽんぽんとすると、恨めしそうに睨みつけるのが謎。

唯一、心を開く相手、勇者が庇ってくれたのに、なにが不服というのか。

そう、俺には魔法使いに目の敵にされる心当たりが、まるでない。

ちなみに俺の性格は、魔法使いと対照的。

根っから人懐こく、積極的に輪のなかに跳びこみ、いつの間にか中心

に据えられているタイプ。

女性関係もにぎやかしく、勇者一行のガチムチ剣士となれば、途切れず女が寄ってくるから、ワンナイトラブし放題。

アレルギーのように人ぎらいな魔法使いは、きつと童貞だろうから、とつかえひつかえ女とエッチしている俺が羨ましいのか？

呻いてもがくうちに、ミノタウロスの体の前面にもたれて、魔法使いにむかって、足をぱっかん。

男同士とはいえ、足を広げて、放尿したばかりのちんこをさらすのは、頬が赤らむ。

ちらりと魔法使いを見やれば、まぬけなさまだからか、目を細めて鼻を鳴らし「ふん」と。

羞恥心で体を熱くしつつ、蔑むように見られて「はあうん・・・！」と背中を震わせる。

「何回も何回もぼくの目のまえで射精して、空イキして、死にたいほどの屈辱を飲んで、墮落してメス化するがいい。

ちんこを啜えずには、生きられない体になればいい」

「せめて、怒る理由を教えて!？」と訴えたいなれど、ミノタウロスにおっぱいを両手で揉まれ「やあん！」とあられもなく鳴いてしまう。

女に乳首をいじられても屁でもなかつたはずが。

揉まれるだけで、あんあん勃起して、乳首を爪でいじられようものなら、先走りをとりとら。

「あ、ああ、うそ、なん、で、体、変・・・！あ、や、やあ、あん、ああん！あう、ずる、魔法、で、感度、ふ、く、ひああ！あ、ああ、だめ、そん、な、おっぱ、や、やあ、やめ、やあん・・・！」



車

X

俺

俺は車を愛している。

全車種、全メーカー、車と名のつくものを分け隔てなくすべて。

そりゃあ、できうる限りコレクションしたいとはいえ、親は資産家ではないし、俺も社長やセレブでなく、平社員。

その身分では、生活費を切りつめても、せいぜい二台所有が限界。とはいえ、俺はいい時代に生まれてきた。

車のサブスクがあるから、ひんぱんに乗りかえることができるし、販売店に友人がいるから、融通も利かせてもらえる。

ということ、半年に一回くらい、乗りかえて、さまざまな車種や、いろいろなメーカーの車を期間内にじっくりと運転して堪能しているわけ。

今、乗っているのは、威容を誇る黒の大型ワゴン。

ハンドルにかかれる独特の重み、アクセルを踏むときに実感する馬力の底しれなさ、エンジンの凄みのある轟き、戦車のような、いかついフォルム、黒光りする頑丈なボディ……。

平等に車を愛したいところなれど、この大型ワゴンにすっかり心を奪

われ、購入して俺のものにしようかと思ったのだが。

休みの日、友人と推しの大型ワゴンで山にドライブ。

駐車場に愛車を停めて、山の散策道を歩いていたところ。

途中でロープが行く手を阻み「立ち入り禁止」の看板。

踵を返そうとしたのを尻目に「いやいや、爽やかな木漏れ日の道がつづいているじゃん」と友人はロープを跨ぎ、前進。

「おいおい」と止めようとしたものを、しばし歩いても「立ち入り禁止」の理由となるような危険物を見かけなかったので「まあいいか」と友人と肩を並べ歓談。

友人も車好きとあって、話は大盛り上がり。

すこし調子をこいて「いやあ、俺は車を抱けちゃうね」と肩をすくめてみたり。

「まさか、おまえ車で又いているんじゃないんだろうな？」

「ノーコメント」「おいおい」と笑いあっていたら、ふと横道が目にはいった。

横道のほうを見やれば、そこは森が開けた土地。

家でも建っているのかと思いきや、目にしたのは、黒焦げの破片の山。

「あれ、火事があったのか？」と呟くと「ん？ほんとだ」と友人も足を止めて曰く。

「でも、このごろ火事があったなんて聞いていないぞ。

俺の実家、ここらへんに近いからさ、もし火事があったなら、すぐに電話してくるだろうし」

「じゃあ、長い間、放っておかれていますってことか？

建物と土地の所有者はどうしたんだ？」

「身寄りのない家主が、火事で亡くなったのかもな。

そういう場合、行政も手がなくて、焼跡をのこしたまま、放っておかれるって聞いたことあるし」

なるほどと思いつつ、土地を見回す。

家は全焼したらしいものの、あたりの木には燃え移らなかつたよう。

すこし離れたところにある車庫も、黒ずみながら、倒壊はしていません。

どうにも車庫が気になり、こんどは俺が率先してロープを超えて敷地内へ。

「ちよ、待てよ」と友人があとにつづくのに、ふりかえらず、車庫へとまっしぐら。

シャツターの窪みに指をいれて力をこめれば、果たして開いて、お目見えたのは・・・。

軽自動車の真っ赤なスポーツカーだ。

どうにか喘ぐのを飲んで「い、いいから！お礼とか！きみを助けられただけで光栄だから！」と訴えるも、もっと強く早く巨根をこすりつけられ、あんあん股間をぐちゅぐちゅ。

「どうして？ぼくに乘っていたとき、褒めていたのは嘘なの？メカが凝縮されて、車体がコンパクトだから、エンジンの音と振動がお尻にダイレクトに伝わってくるのが、たまらないって」

俺の頬を舐めて「ほら、もっと、ダイレクトにぼくに乘ってみたくない？」と涙目で囁かれて、心がぐらついて。

が、「あ、くう、だ、めだ！子供に、こんな・・・！」と抵抗。

とって、口だけで「ごめんね、ご主人さま」と無力にもパンツをずらされる。

「は、はあ・・・ぼく、も、ガマンできないのお・・・」

お願い、ぼくに乗って、いっばいぼくのエンジンの情熱を受けとめて」

尻の奥に押し当てられる固いもの。

ぎくりとしたとはいえ、尻の奥にすんなり侵入してきたのは、巨根でもなければ指でもなさそう。

「あ、うそ、なに、これ、あう、ああ、や、やあ、だめえ、そん、な、かき、回さ、な、でえ・・・！」

猫
×
俺



朝起きたら、自室のベッドのうえで猫になっていた。

カフカの「変身」のようで、似て非なる珍妙な状況。

完全に猫と化してはいなく、三角の耳と尻尾がついて、あと長い牙と長い髭が生えただけ。

言葉を話せるのは同じなれど、語尾に「ニャー」がつく。

そしてもう一つ、文学作品とチガウことが。

「おはよう、龍平さん」

自室のドアを開けたのは、見知らぬ男。

吊り目が特徴的なイケメンで、すらりとした体型に輪郭や所作がなめらか。

俺が猫になった挙句、赤の他人の男が不法侵入して、我が物顔でふるまっている！？

なんて、意外と驚かず。

俺の猫化はさておき、男については、どうにも見覚えがあつたから。

飼ひ猫のトラに似ているよーな。

つまり、俺が猫になったと同時に、トラも人になったのではないか。

カクニンするため、単刀直入に男に問うてみると、そのとおりだという。

また、こうなった経緯のような話も聞かせてくれて。

「龍平さんが毎日毎日、仕事が辛そうで心配だったんです。

上司のハラスメントにあって、先輩にはムシされて、同僚には足を引っ張られて、後輩には舐められて・・・。

仕事を辞めたいと云いつつ、決心がつかず、俺を飼いつづけるためにもと、休まず出勤していたのが、見ていて心ぐるしくて。

疲れがとれないようで、ずっと顔色がわるい龍平さんの心身がダイジ

ヨウブだろうか、気が気でなかったし、俺のために辞められないなら、申し訳なくも思った。

だから神様に祈ったんです。

龍平さんの仕事での重圧や重荷を、俺にすべて背負わせてくださいって。

そしたら、神様が叶えてくれたようで、こういうことになったんですよ

「おまえは分かるとしてニャー、どうして俺は猫ニャー」と聞けば「酔っぱらうと『あー猫になって一日中ごろごろしててえ!』ってよく喚いていたからじゃないですかね」と。

精液まみれのズボンを、変わらず張りつめたまま、頭を混乱させるうちに、息の荒いトラが、俺のTシャツをめぐり、胸に顔を寄せて。一週間、風呂にはいっていなく、体臭がひどいだろうにかまわず、舌で乳首を。

「にやあうん！」と甲高く鳴いて、ざらざられるると乳首を舐めまわされるのに、にやんにやん喘ぎまくり。

自覚がなかっただけで敏感なのか、舌のざらつきが快感を呼び起こすのか。

なににしろ、胸でヨがるのは男として耐えがたく、第一に猫の鳴き声を交えてあんあんするのが恥ずかしすぎて。

とめどなくお漏らしをしながらも、力のはいらない体で、どうにか抗おうとすれば、トラは胸に顔を埋めたまま、尻尾をにぎった。と同時に「にやひいいい！」と悲鳴をあげ、腰をびくんびくん。

射精しそうになったのを、ぎりぎりで堪えたとはいえ、尻尾が性感帯なのはばればれ。

「ふ」と笑ったトラは、尻尾を強くにぎったまま、先っぽを胸へと。ざらついた舌で乳首を舐めるのを再開し、もう片方の乳首を尻尾でこしよこしよ。

「にやあ、だめえ、なに、これえ、やだあ・・・！は、にやう、し、尻尾で、いた、ずら、しな、にや、にやあ、にやあん、や、やあ、でちや、俺、胸、だけ、でえ、ひにや、いやにやああああ！」

